

不揃いの野菜のように

上 廣 榮 治

八月号で上杉鷹山の「為せば成る」というお話をしたことは、まだご記憶に新しいことと思います。その鷹山の実践を導いたのが、学問の師であった細井平洲ほそいへいしゅうであることにも触れました。今回はその細井平洲についてご紹介したいと思います。

江戸時代の中期、現在の愛知県東海市の農家に生まれた平洲は、幼い頃から学問に励み、名古屋で儒学を学んで長崎に遊学したのち、二十四歳のとき江戸に出て、私塾「嚶鳴館おうめいかん」を開いて、武士町人の区別なく学問を教えました。この塾名には、鳥がさえずり合うように、人も仲良く語り合おうという意味が込められていました。

平洲は塾で教えるだけでなく、両国橋のたもとで辻説法も行ないました。比喻ひゆを使った巧みな彼の語り口は評判を呼び、大名家などにも招聘しょうへいされて藩政改革を指導するようになりました。上杉家の養子、若き日の鷹山の教育係となったのも、そうした経緯からでした。

藩政を改革するため、平洲がまず藩主たちに教えたのは、「治者ちしやは民の父母であれ」ということでした。

親は自分が飢えて凍えるよりも、子が飢えて凍えることを嘆き悲しむものである。同じように、君主は民の仕合わせを第一に考えること。そして、そのためには「君主自らが率先して改革を実践せよ」ということでした。

また、平洲は常々「学思行あいまって良となす」といっていました。「学び、考え、実行して」はじめて学んだことになる。学問は実践が伴わなければ意味がない、ということなのです。平洲の学問が実社会で役立つ「実学」であったことが、彼のもとに多くの人を惹きつけたのでしよう。

今から二百年余り前、平洲は七十四歳で亡くなりますが、没後、教えを受けた人たちが師の教えを後世に伝えようと、講義録や書簡を基に『嚶鳴館遺草』を編纂し刊行しました。こうして平洲の教えは、その後も多くの人に受け継がれていったのです。

経済と道徳を結びつけて実践した二宮尊徳も、この書の影響を強く受けたといわれます。また、多くの人材を育てることで明治維新を用意した吉田松陰も、「この書にまさる経世済民（世の中を治め、民の苦しみを救うこと）の書はない」と高く評価し、松下村塾のテキストとしても使いました。西郷隆盛にいたっては、沖永良部島に流された日々、これを三度も書き写し、「政治の道はこの一書に尽きる」といっています。彼が好んだ「敬天愛人（天を敬い、人を愛す）」という言葉も平洲の教えに基づくもので、西郷の「南洲」という号は「南の島の平洲」の意味だったともいわれます。

これらの人たちはみな、上杉鷹山と同じように、「無私」に徹した人として知られています。細井平洲に私淑していたことと無縁ではないでしょう。

さて、多くの藩政改革を指導した平洲でしたが、その改革の柱は「人づくり」でした。そのため、『嚶鳴館遺草』には、子育てに言及した部分が少ないから散見されます。

子育てといえば、我が会の会友たちの関心事のひとつでもあります。よく、「うちの子は素直でやさしいのはいいのですが、勉強が嫌いで困っています」とか、「作文は得意なのですが、算数が苦手です困ります」などというお母さんがいます。それは本当に困ったことなのでしょう。どうしたらいいのでしょうか。子育てについて、少し平洲先生の意見に耳を傾けてみましょう。

まず、子育ての基本は「親が善き手本」となることだといいます。弓作りの職人の子は、父親が堅い木を曲げて弓を作るのを見て、柔らかい枝を曲げて箕みを作ることを覚えるように、「子は親を見まね聞きまねして、学び育つものだ。だから、親は善悪ぜんあく邪正じやしょうの心を持って、率先して善い行ないをしなければならぬ」というのです。

子どものしつけは「鍛えることを習慣とすることが大事だ」ともいつています。硬い鉄さえも、五回、十回と鍛えるほどに、切れ味鋭い刀になっていく。人も日にさらされ風に吹かれて、寒暑に耐えてこそ強くなる。庶民の子は、悪さをすれば親や兄弟ばかりか他人からも厳しく諫められ、日々鍛えられて、物事の道理を知り、他人を畏おそれ敬うことの大切さを習い覚えていくものだ。しかし、裕福な家に生まれた子は、甘やかされて育つため、奢おごり高ぶったり、乱暴になったりしがちであると、過保護になることを戒めます。

また、良木を育てるには、苗木のときから添え木をし、縄でしばって曲がりを防ぎ、心を尽くして世話することが大事なように、人も発達段階に応じた適切な教育が大切である。しかし、自分の思うようになる苗木だからといって、無理に曲げたり撓たわめたりすれば、枯れたり、ねじけたりして、先々用材として役に立たなくなると、親の身勝手な過干渉にも釘をさします。

そして、誰にとっても大切なのは学問だと、平洲先生は強調します。玉も琢みがかなければ器うつわにならないように、人も学問によらなければ、人としての道を知ることができず、人となることはできない。自分の思いだ

けを基準にして、それを拠り所としているかぎり、尺がね（直角定規）を使わず目分量で四角いものを作ったり、分回し（コンパス）を使わずに丸いものを作るようなものだ。どのような仕事であれ、生まれたままの才能だけでは名人上手にはなれない、というのです。

では、そのようにして、道理をわきまえ勉強にもすぐれた子になるように教育すればよいのかというと、先生は違うといっています。ここからが平洲先生の真骨頂しんこつちやうです。

人を育てる心得は、菊好きの人が菊を作るようにしてはならず、百姓が菜っ葉や大根を作るようにすることだということです。

菊好きの人は、見事な形の花ばかりが揃うようにと菊を育てます。余計な枝をもぎ、無駄な蕾つぼみを摘み取って、好みどおりの菊の花に仕立てます。しかし、百姓の野菜作りは、大きさも形も不揃いのまま、それぞれを丹精込めて育てて、すべてを食用に供します。教育も同じだということです。それぞれの子どもの資質に応じて、その善さを伸ばしていくことが肝要だということです。むしろ、不揃いであることに積極的な意義があるとさえ、いえるのかもしれませんが。

平洲先生のこの考え方の根底にあるものは、どんな人でも無用の人などいないという信念です。さまざまの人がいてこそその世の中だ。助けを必要とする人がいてこそ、人を助ける人がいる。人と人が互いの価値を認め合い、共に支え合う社会こそ真に調和の取れた社会であると、平洲先生は考え、そんな社会を夢みているのかもしれない。

さて、皆さんの子育てについての疑問や悩みも、平洲先生の教えの中に解決へのヒントや答えがありそうですが、いかがでしょうか。